

「……………」

「目が覚めたかな、  
幻装戦姫ヴァルスセラ……」

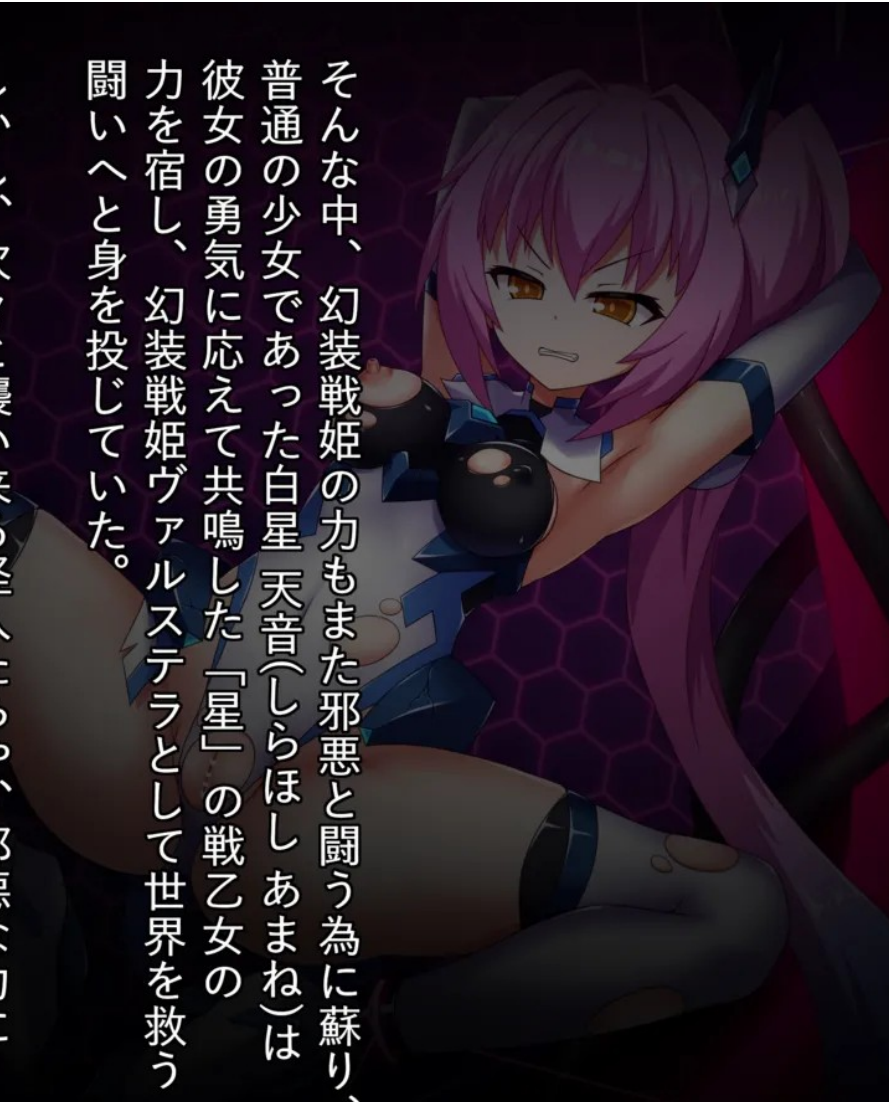
「いや、  
自星天音くん」



遠い昔、世界を脅かした邪悪な存在、**ヴォーデイス**。  
正義の戦乙女、幻装戦姫たちによって封印された  
筈のそれは、突如として復活し再び世界を恐怖に  
陥れていた。

そんな中、幻装戦姫の力もまた邪悪と闘う為に蘇り、  
普通の少女であった白星天音(しらほしあまね)は  
彼女の勇気に応えて共鳴した「星」の戦乙女の  
力を宿し、幻装戦姫ヴァルステラとして世界を救う  
闘いへと身を投じていた。

しかし、次々と襲い来る怪人たちや、邪悪な力に  
魅せられ、数を増やすばかりの戦闘員との戦いに  
消耗した隙を突かれたヴァルステラは、  
ついに捕らえられ、ヴォーデイスの潜む秘密基地  
へと連れ去られてしまったのであった……。



「あなたが……ヴォーデイス？」  
「まさか……人間なの……？」

ヴァルステラはガラスの向こうで機械を操作する  
白衣の男に疑問を投げかける。

いつも戦う相手はヴォーデイスの配下ばかりで、  
仇敵の姿を直接見たことは無かった。

しかしヴォーデイスが怪人に指示を出す際の声は  
耳にしたことがある。

その声が目の前の男から発せられた事に  
驚きを隠せずいた。





「そう、我こそがヴォーデイス」  
「愚かな人類を支配し、世界を手中に収めるべき存在だ」

「そんな事！ 私達が許さない！」

当然のように語るヴォーデイスに、ありったけの敵意を向けるが……。

「その有様でか？ 愚かな幻装戦姫よ」

「……っ」

「だが、確かにこのままでは容易くはないだろう」

「この貧弱な身体もあくまで封印を完全に解き、  
我本来の身体を取り戻すまでの乗り物に過ぎぬ」

「本来の……身体……？」

「そう、未だ次元の狭間囚われたままの我が身体を  
取り戻すことこそ我が悲願」

「その為に……」

ヴォーデイスの回元が邪悪に歪む。



「お前を我が軍の仲間として迎え入れたい」

「……え？」

あまりにも突拍子の無い言葉にあっけにとられるヴァルステラ。しかしすぐにその表情は怒りへと変わる。

「ふざけないで！ 私がヴォーデイスの仲間になんてなる訳が……っ!?」



想定通りとでも言っかのようだ、ヴァルステラの言葉を最後まで聞くことなくヴォーデイスは手元の機械を操作する。

すると、今までヴァルステラを拘束したまま静かに佇んでいた機械が唸りを上げ、無数のコードで繋がれた機器が彼女の身体へと繋がれる。

「ふ、これは……何を……」



「我が眠っている間に人間は実に興味深い物を  
作り上げたようだ」

「これは人間を快楽で壊し、洗脳する為の機械」

「これでお前を我が僕に相応しい存在に  
生まれ変わらせてやろう」

「……っ やってみなさい！」

「私はこんな機械なんかには負けたりしない！」



恐怖を感じていないと言ったら嘘になる。  
だがヴァルステラの心はまだ希望を  
失ってはいなかった。

「(怖い……けど耐えればいい)」

「(私が耐えてさえいれば、きっとこの場所を  
見つけ出して……)」

「そうか、では精々頑張ってくれ」



「んっ……くっ、はうう……っー」

「(な……何これ!? 全身熱くて……  
特に……おっぱいと、あそこが……っ)」

「んっ、んれくらら……っ」

全身が煮えたぎるような熱に浮かされ、  
今まで感じたことのない疼きが思考を惑わす。

「(でも、耐えられない程じゃない……っ)」



「どうやら大口を叩くだけの事はあるようだ」

「……ではこれを使っても問題ないだろう」

「な、何をするつも……ひああああ!？」

言い終えるよりも早く、  
股間に新たな機器が装着される。

「っっ、これ 耐え……っ」

ああああああ——っ!



頭の先まで貫くかのような衝撃。  
ギリギリを保っていたヴァルステラの身体は  
いとも容易く絶頂し、感情を持たない機械は  
そんなヴァルステラにはお構いなく  
ただひたすら快感を注ぎ続ける。

「あっ、おおっ♡」

「止め、へっ、おおっ♡」

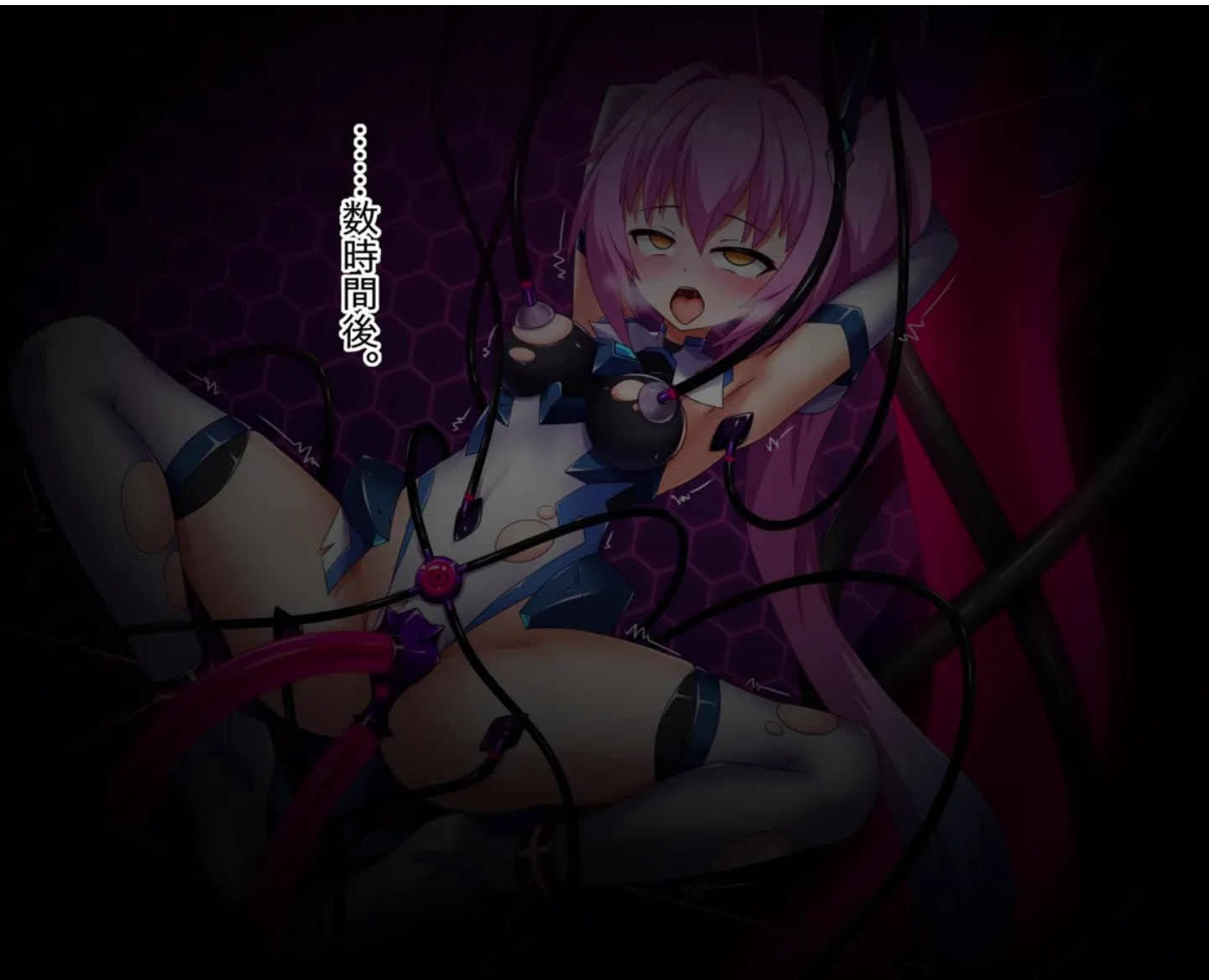
「ではしばらくそうしていると良い  
程よくほぐれた頃に様子を見に来てやろう」

「あっ、待……っ」

んあああああああ♡」



。。。。。。  
数時間後。



「おっ……♡ んおっ♡」

「ま、けな……ら……♡」

邪悪な機械に繋がれ、壊れたように痙攣しながら  
絶頂し続けるヴァルステラ。  
その瞳には未だ強い意志の光が宿っていた。

しかし……。

「ほう、まだそれだけの理性を保っているとは」



「んひっ……ん、」 ぐれくらら何とも、 ない……っ」

「はーっ、 はーっ………♡ こんなことしたって、  
私は……あなたになんか……っ」

「そうだろう、 ここまでは  
下準備に過ぎぬのだからな」

「……え……？」





強烈すぎる肉悦で心を砕き、  
そのヒビに入り込むように浸透してくる悪しき心  
絶頂する度、心も身体も致命的に元とは違うモノ  
へと変質させられていく。

「んおおおっ♡ イく……っ♡」  
「(ちがう……私は、ヴォーデイスなんか……)」

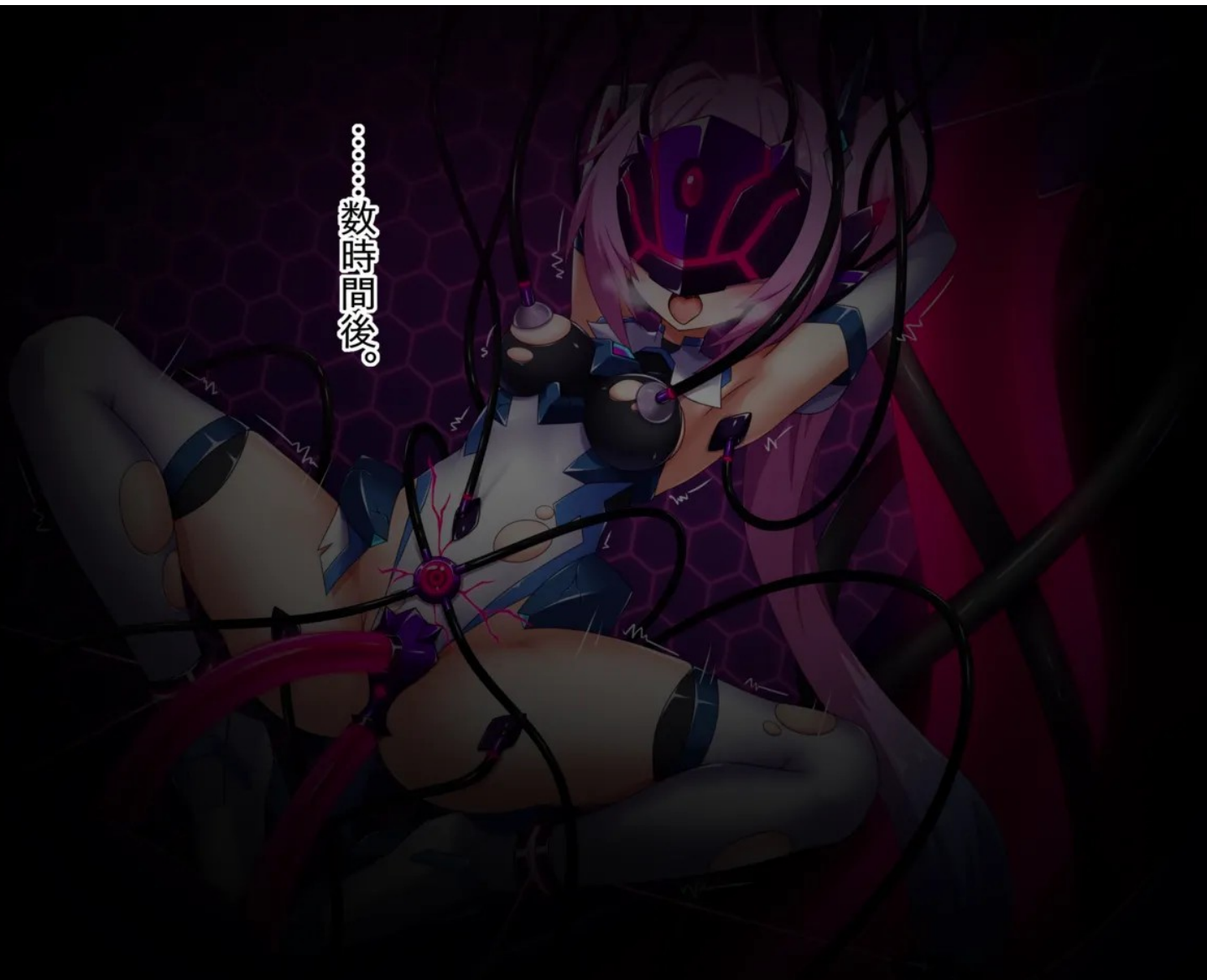
「おっ、おおっ♡  
イクっ♡ イグウウウツ♡♡♡」

「(わ、たし……は……♡)」





.....  
数時間後。



そこにはいまだ断続的に絶頂し、弱弱しく  
痙攣するヴァルステラ。『だった』少女が居た。

「は、へ……♡……♡……んお……♡……」

「おっ♡……おっ♡……おっ♡……おっ♡……」

その様子を観察していたヴォーデイスが  
再び彼女へと声をかける。



「改めて問おう」

「お前は愚かな人間どもを裏切り、  
我が完全に復活する目の為に闘う事を誓うか？」

「……」

「我に忠誠を誓い、邪魔をする幻装戦姫どもを  
屈服させる為に力を振るうか？」

「私の与える快樂だけを浅ましく求める……  
我が忠実なる僕、奴隷となる事を誓うか？」



「私が……みんなを裏切る?」

「私が……ヴォーデイスの為に闘う?」

「(忠誠を……誓う?)」

「(……そんな事、想像しただけで)」



「(す)く興奮しちゃっ♡)」



「……………ちゅ、かう……………」

「誓うー誓います！」

「私はヴォーデイス様に絶対の忠誠を誓いますう！  
歯向かった私が愚かでしたあ！  
もう世界なんてどうでもいいっ♡  
ご主人様が……ご主人様が与えて下さる  
快楽があればっ、もう何も要らないのおっ♡」



「あっ……♡ あああああああ♡♡」

刹那、かろうじて形を保っていたスーツが霧散し、ドス黒い闇となって堕ちた戦乙女の身体を蹂躞する。

「クク………始まったか」



少女を覆う闇は、生まれ変わった主に相應しい  
スーツへと変化していく。

それは首から下を隙間なく覆い、艶めかしい光沢  
で堕ちた少女の肢体を淫靡に彩る。

続いて闇色に染まったコアクリスタルが再生成され、  
以前のスーツを模した、しかし禍々しく攻撃的な  
形状となったアーマーが手足を包み込む。

光を失った瞳が嗜虐に染まり、刻まれた淫紋が  
心に暗い欲望の火を灯す……。

そして、闇の戦乙女が誕生する。



「はあああああ……♡」

「気分はどうだ、新たなる僕よ」

「はい……最高です♡ ヴォーデイス様♡」

仕えるべき主の声に、思考を覆っていたモヤが  
晴れ、意識がハッキリする。

その視線は、変わり果てた自身の姿を舐め回す  
かのようにウツトリと見つめる。



「(すっぴい……♡ スーツが全身の肌に吸いついて、  
全身締め付けられて気持ちいい♡)」

「(淫紋の疼きが子宮から全身に広がって……♡  
スーツの中で暴れまわっておかしくなりそう♡)」

「(なのに思考はすごくスッキリして……)」

「(ドス黒い力がどんどん溢れて……ご主人様の  
敵を虐めたくてたまらない♡)」



「お前はもはや我に楯突く  
愚かな幻装戦姫ではない……」

「隷装淫姫イヴィルステラ  
……それがお前の名だ」

「あは……♡♡♡  
ありがとうございます♡♡♡」



「私、イヴィルステラは……ヴォーデイス様が  
真の姿を取り戻し、偉大なる野望を  
果たすための駒としてこの身を捧げます♡」

「私の身も心も、全てご主人様のものです♡」

「ああ……素晴らしい……  
期待しているぞ、イヴィルステラ」

「ふふ……♡  
お任せください、ご主人様♡」







